

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12970

研究課題名（和文）西洋近世「イソップ集」の諸相および伝播に関する文献学的総合研究

研究課題名（英文）A Study on Aspects and Diffusion of Aesop's Books in the Early Modern Europe

研究代表者

吉川 斉 (Yoshikawa, Hitoshi)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：60773851

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、『エソポのハプルス』の原典への関心を基点とし、その背後にあるものとして、16世紀を中心としたヨーロッパにおけるイソップ集の再検討を目指すものであった。

主要な研究成果は、次の二点である。（1）近世印刷本ファエドルス集について、最初の刊行本を中心にその在り方を検討し、近世ならではのと思われる特徴を考察した。（2）1610年刊行のイソップ集（ネヴェレ本）について、挿絵とテキストを分析して、当時の出版事情とも関わる複層的な関係性を明らかにした。

以上の成果により、とくに15世紀後半から17世紀初頭の印刷本イソップ集について、その諸相や伝播の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、16世紀頃のヨーロッパにおける主にギリシア語・ラテン語による印刷本イソップ集の諸相と伝播の様態の一端を明らかにするものである。この時期のイソップ集は15世紀後半の初期印刷本に比して注目度が低いが、近代への展開の基盤でありながら近代とは異なる特徴を持つものとして、改めて検討されるべき対象であることを明確にした。

また、本研究で扱った写本と印刷本、挿絵と本文テキストの関係等は、イソップ集に限らず、近世印刷本を検討する上で重要な要素となることが想定される。その点で、本研究の成果は、多分野多領域に関わる有意義な視点を供しうるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study was based on an interest in the original source(s) of 'Esopo no Fabulas', and primarily reexamined Aesop's fable collections around 16th-century Europe.

The main results of the research are as follows: (1) We investigated the nature of early modern printed editions of Phaedrus' collection, particularly the so-called 'editio princeps', and explored features unique to that period. (2) We analyzed the relationship between illustrations and text in the 1610 edition of Aesop's collection (known as the Nevelet edition), and revealed complex dynamics influenced by publishing practices of the period.

These results clarified (though partly) on aspects and diffusion of printed Aesop collections, especially during the late 15th century to the early 17th century.

研究分野：西洋古典学

キーワード：古典受容 イソップ 西洋古典

1. 研究開始当初の背景

近世ヨーロッパにおいては、16世紀初頭に『修辞学初等教程』(*Progymnasmata*)などの古代の修辞学教育が再び脚光を浴びており、1505年に刊行されたアルドゥス・マヌティウス編纂によるギリシア語・ラテン語対訳イソップ集は、その点を意識したものであったように見える。アルドゥス集の場合は、古典語教育(とくにギリシア語)の学習用教材としての意識も見受けられるが、むしろその後はラテン語部分のみが注目される状況も生じていた。また、16世紀には多数のイソップ集が生み出されたが、たとえば1530年頃にマルティン・ルターが教化を意図したドイツ語イソップ集を編纂しており(ただし未完)、1542年にパリで刊行されたフランス語イソップ集はいわゆるエンブレム・ブックの体裁をとるものであった。16世紀の状況を概観するに、アルドゥスが示したような言語教育ないし修辞学教育的な位置づけと、ある種の教育読本としての位置づけが渾然としている様子を見て取れる。そして、この渾然とした状況は、彼らが参照し、底本としたイソップ集についても同様であった。

これまで15、16世紀のイソップ集を検討するなかでみてきたことのひとつは、イソップ集は古代から読まれ続けてきたとはいえ、近世のルネサンスの影響がないわけではない、ということである。中世ヨーロッパでおもに広がっていたイソップ集は、例外はあるものの、古代のファエドルス集に由来するラテン語散文イソップ集の系統である。1世紀頃のファエドルスが編纂したラテン語韻文イソップ集は、彼独自の要素や筋書きが多く含まれ、古代に編纂されたギリシア語のイソップ集とは、その内容が似て非なる話が多い。一方、ルネサンス以降には、再びギリシア語のイソップ集が注目されるようになり、ギリシア語からの翻訳を謳う刊本なども登場してくる。すなわち、16世紀の状況として、ラテン語系統の話、ギリシア語系統の話、さらには当時創作・改変された話などが多層的に拡がり、多様なヴァリエーションの話が参照可能な状態となっていた。

1593年に日本で翻訳刊行された『エソポのハブラス』は、こうした時期のイエズス会士により日本へと持ち込まれたイソップ集が基礎となっていると推測できる。当時のイエズス会の教育課程においてラテン語訳『修辞学初等教程』を教科書とした作文教育が含まれており、彼らが主体的にイソップ集を持ち込んだと考えることに問題はない。研究開始当初は、『エソポのハブラス』の各話の内容分析を進めるなかで、『エソポのハブラス』の原典を今後考察するための方向性に関して、以下の気づきが得られていた。

(1) 原典には近世に創作・改変された話を含むものが含まれる

(2) 原典にはギリシア語系統の話を含むものが含まれる

多層的に展開した西洋近世のイソップ集が日本へ伝播し再構成されたものとして『エソポのハブラス』を位置づけた場合、その原典としては、同時代である16世紀の西洋におけるイソップ集の在り方の再検討が重要であることが明らかであった。一方、従来のイソップ研究において、とくに16世紀は一種の狭間の期間となっており、その多様性に比して注目度が低い。そのため、16世紀のイソップ集の在り方を適正に取り上げることにも必要な状況であった。

2. 研究の目的

本研究課題は、以上の背景から得られた気づきを作業仮説として、とくに16世紀のヨーロッパにおけるイソップ集を再検討し、いまだ詳らかではない『エソポのハブラス』の原典について問い直そうとするものであった。そこで、本研究で考究すべき目的として、以下の3点を設定した。

(1) 16世紀のヨーロッパで出版されたイソップ集の実態調査

(2) 同時代のイソップ集の社会的位置づけの解明

(3) 同時代のイソップ集の様態をふまえた『エソポのハブラス』の分析

3. 研究の方法

基本的な方法としては、文献資料を渉猟して当時のイソップ集の位置づけをはかりつつ、各種イソップ集の相互的なテキスト分析を通じて、おもに16世紀のイソップ集の在り方を検討する。また、本研究では、各地で公開の進む電子化資料を活用することを第一とした。なお、上記目的のうち(1)と(2)を順次進めることとし、(3)は可能な段階で取り組む想定とした。

(1)(2)については、おもに16世紀に登場した印刷本イソップ集についての調査・分析を行った。とくにギリシア語・ラテン語によるイソップ集に注目し、そこから派生する形で各国語版イソップ集を対象を拡大した。そのうえで、各イソップ集のテキストや挿絵の比較検討を行い、当時のイソップ集の在り方について詳らかにする方針をとった。

4. 研究成果

16世紀頃のイソップ集に関しては、以下の2点が中心的な成果である。

(1) 近世印刷本ファエドルス集について

現存する古代のイソップ集のひとつとして、紀元1世紀にファエドルスによって編集されたと考えられる、ラテン語韻文による5巻本のイソップ集(ファエドルス集)がある。ファエドルス集は、最初の印刷本であるPithoeus本が1596年に刊行され(画像データが電子公開されている)その後複数の印刷本が刊行されている。ファエドルス集では、写本P,Rと呼ばれる、全体を含むと思しき9世紀頃の写本が二つ認められているが、そのうち一つ(写本R)は1774年に焼失し、現存しない。焼失した写本については、焼失までにファエドルス集刊行などのために参照されており、ある程度の記録は残る。なお、ファエドルス集由来の話を含む写本も幾つか認められるが、いわゆる抄録であり、他のイソップ集由来の話と混在して構成されている。

ファエドルス集は、現存する写本では4巻本として筆写されており、一方、焼失した写本では古代の伝承どおりに5巻本とされていたと記録されている(ただし巻の区切りは不明)。両者同じ話を同じ配列で含むが、話の配列そのものに疑義が残り、2020年に刊行された最新の校訂本では、大胆な提案がなされている。

そうした状況のファエドルス集について、1600年前後に刊行され、近世の各種ファエドルス集の基礎となった二種の印刷本、1596年刊行のPithoeus本および1617年刊行のRigaltius本の詳細な分析を行い、論文にまとめた(『近世印刷本ファエドルス集の構成について』『成城文藝』2023年)。

上記のとおり、ファエドルス集の主要写本は9世紀頃の写本Pと写本Rであるが、Pithoeusは写本Pを、Rigaltiusはさらに写本Rも利用して、ファエドルス集を編纂した。詳細な分析の結果、これらの印刷本が、個々の話の配列は写本のそれを遵守していること、その一方で、個々の話やテキスト、巻の分け方等には、編者それぞれの判断が反映されていること、そのため、配列順は同じでありながら、両者が別のファエドルス集を提示していることが明らかになった。同時に、こうした在り方が、写本との向き合い方、文献学の様相という面も含めて、19世紀以降に刊行された近代のファエドルス集とは性質の異なるものであることも確認できた。

また、Rigaltius本は3度に渡って改訂版が出されている(1617年本は第2版)。一方、1610年に刊行されたNeveletによるイソップ集(ネヴェレ本)はRigaltiusの初版のファエドルス集を採録しており、ここには改訂による修正は含まれない。ネヴェレ本は17世紀以降に広く読まれるイソップ集となったことを考えると、そこで提示されるファエドルス集が改訂を含まないものであったことは、改訂版を編纂したRigaltiusからすると(もし本人が認識しえたとすれば)不本意であったはずである。とはいえ、こうした事態はむしろ、そのとき何が参照されるか、どのように作品が広がりうるかという点で、個別の対象への注目の重要性を示唆しているようにも考えられるものであった。私たちが現在「ファエドルス集」として認識するものが、近世のそれと必ずしも一致するわけではないことには注意を要する。

(2) ネヴェレ本の挿絵とテキストについて

ギリシア語・ラテン語による各種イソップ集を含み、当時のイソップ集としてひとつの集大成であった1610年刊行の印刷本イソップ集(ネヴェレ本)を中心に、当時のイソップ集でしばしば流用され重複する挿絵に注目し、ファエドルス集を含めて、ネヴェレ本に至る複数の近世印刷本イソップ集を分析した。挿絵とテキストの関係を詳細に検討し、ネヴェレ本の挿絵が抱える事情を明らかにした(『近世印刷本イソップ集の本文と挿絵に関する一考察』1610年刊行ネヴェレ本を中心として)『成城文藝』2023年)。

ネヴェレ本は、おそらく同書刊行より四半世紀以上前に制作された既存の挿絵のストックを利用して挿絵を印刷していたと推測できるが、そのストックとなる挿絵群の形成過程を含め、挿絵とテキストをめぐる複層的な関係があったことを、具体的な検討を通じて分析した。また、ネヴェレ本にみられる挿絵の流用や重複利用はネヴェレ本以前からすでに行われており、この点は、当時の出版事情なども合わせて考える必要があることが分かった。

一方、本文テキストと挿絵の関係性において複雑な状況が発生している一因として、イソップ集ならではの事情も考えられる。すなわち、個々の話が図像化されやすい対象であること、登場する動物や要素等が(一部でも)重なる話が多いこと、一つの話に複数のバージョンが存在することがしばしばあり、翻訳などによる変容も相俟って、とくに近世にはそれらが並存していること、各地でたびたび出版されて普及していたこと、などである。さらに、挿絵そのものに注目すると、挿絵がテキスト本文を元に描かれたと思しき事例のほか、挿絵画家が先行する挿絵の図案を利用して事例も多々見受けられ、テキスト本文とはまた別の、挿絵の伝統とも呼ぶうるものも生じていることが明らかになった。

こうした条件が多層的に絡み合い、最終的に本文テキストと組み合わせて挿絵が印刷されたとき、挿絵の図案そのものは、一見すると本文から乖離した誤った挿絵に見えるものも、実はそこにはない(別のバージョンの)テキストに対応したものの、という状態が発生する。ネヴェレ本の場合は、そもそも挿絵の制作自体にはさほど関与していないため、挿絵選択に少なからず本文

テキストへの配慮は窺えるとはいえ、おのずと限界があった。

なお、一般にテキストとそれに附された挿絵は内容が対応するものと想定されるが、ネヴェレ本のように、流用される挿絵はその限りではない。その背後には、細部が微妙に異なる「同一」の話が時代を超えて複数存在するイソップ集ならではの特徴が浮かび上がる。その点で、挿絵とテキストの関係に注目したとき、むしろ既存の挿絵がのちの異なるイソップ集の本文テキストに影響を与えていた可能性も考えられる。そのため、近世以降のイソップ集の在り方や伝播の追究にあたっては、印刷本における挿絵の問題も重要であると認識するに至った。

以上の成果につながる研究を通じて、15世紀後半から17世紀初頭にかけての、主にラテン語・ギリシア語版の印刷本イソップ集を幅広く検討することができた。とりわけファエドルス集と、当時の古典語イソップ集の一種の集大成であったネヴェレ本を詳細に分析することで、西洋近世イソップ集の諸相および伝播について、その一端を明らかにすることができた。とはいえ、未だ全体像を把握するには至っておらず、同時代に日本へもたらされたと思しきラテン語イソップ集についても、さらなる探究が必要な状況といえる。

その他、近世の印刷本に関わる以下のデジタル画像化作業を行った。

(3) 1517年刊行ホメロス全集の撮影

当該印刷本は、17世紀の学者による書き込みのある、1517年アルドゥス刊行ホメロス全集である。イソップ集とは直接関係ないが、当時の出版事情がイソップ集の分析にも重要であることはここまでも確認できている。当該印刷本をお借りする機会を得たため、全ページのデジタル画像化に取り組んだ。資料の性質上、画像の公開は予定していないが、近世ヨーロッパの印刷本や古典学等について考察する手がかりとなる貴重なデータであり、近世のイソップ集と並行して、今後改めて検討を進める必要があると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 吉川 育	4. 巻 263
2. 論文標題 近世印刷本イソップ集の本文と挿絵に関する一考察 1610年刊行ネヴェレ本を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 40(65)-2(102)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉川 育	4. 巻 261
2. 論文標題 近世印刷本ファエドルス集の構成について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 51(80)-28(103)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------